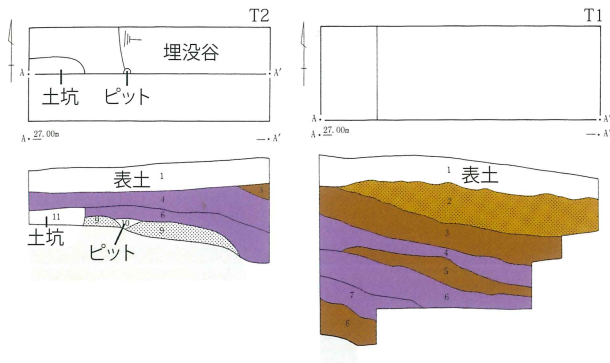
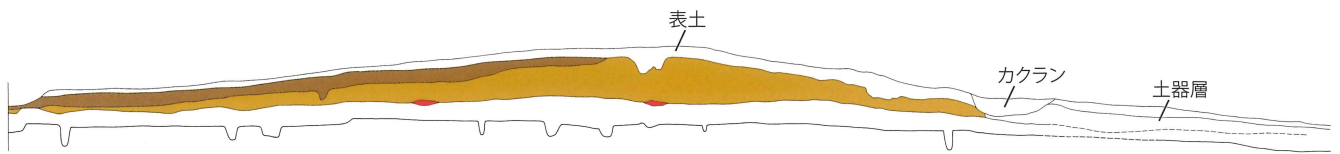
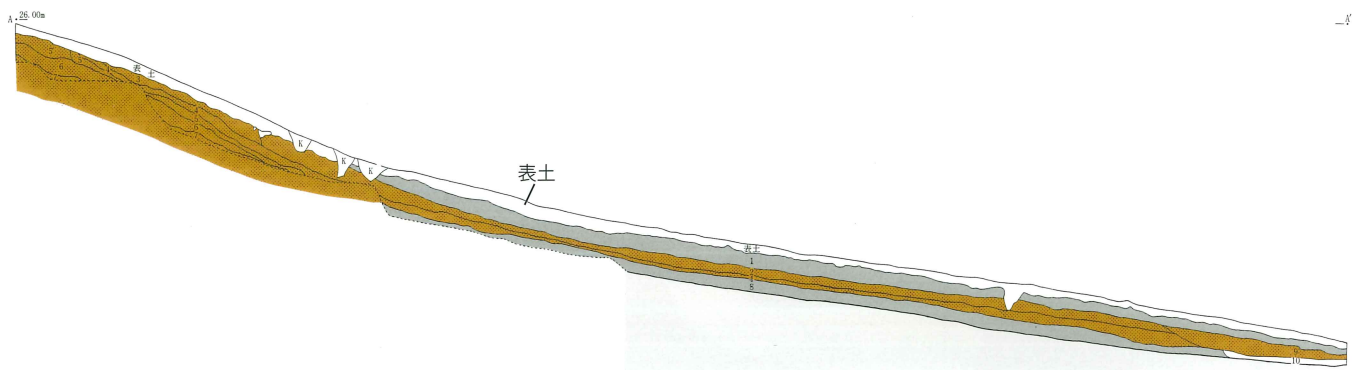


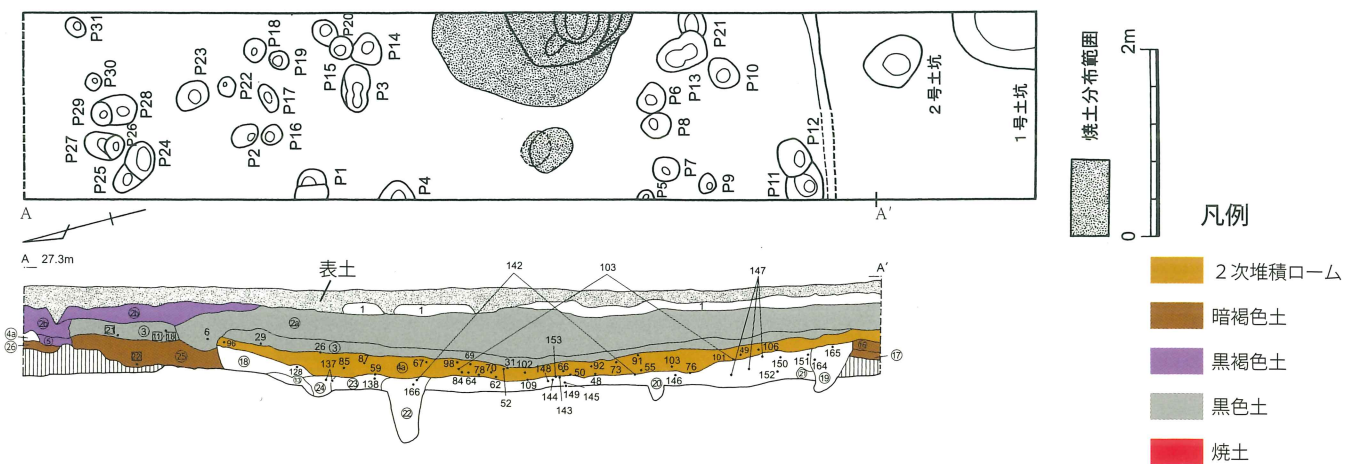


盛土 (M1) 下の埋没谷土層断面 S = 1/120

東側台地縁辺 (T3) の埋没谷



東側斜面トレンチの2次堆積ローム S = 1/240



盛土 (M7) 下の住居跡 S = 1/80

器塚というような貝や土器の一括・集中的、あるいは長期的な廃棄行為の意味と土地利用のしかた（場の使い方）の関係を併せて検討していく必要がある。

文献

2004『佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 井野長割遺跡（第8次）』佐倉市教育委員会

2010『平成21年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書—井野長割遺跡—第17次調査報告書・総括報告書—』佐倉市教育委員会

埼玉県下の盛土調査

(公財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

吉田 稔

1. 県内の環状盛土遺構を中心とする後・晩期の遺跡

県内の後・晩期の主要遺跡は、荒川左岸の大宮台地上に分布する。中でも県中央部から南部にかけて流れる元荒川、綾瀬川、芝川流域に多い。これらの遺跡は、台地崖線きわに形成されることもあるが、支谷に入った谷頭付近に形成されていることもある。

環状盛土遺構は、県内最北の長竹遺跡(43)に始まり、
おばやしはつそく 小林八束1遺跡 (37)、うしろや 後谷遺跡 (34)、みやおかひかわ 宮岡氷川神社前遺跡 (35)、うたや 雅楽谷遺跡 (8)、ほんがみ 本上遺跡 (28)、氷川神社遺跡 (25)、ばんばおむろやま 馬場小室山遺跡 (22) などがあるが、この他にも想定されている遺跡がいくつかある。また、
あかぎ 赤城遺跡 (41) や せいざえもん 清左衛門遺跡 (1) など、盛土が削平された可能性がある後・晩期の大規模集落跡もある。

雅楽谷遺跡は、元荒川とその支谷に挟まれた白岡・黒浜支台の縁辺部に立地している。盛土は、中央部径45mが円形に窪み、西側縁辺の一部を開口して台地肩部に盛土が廻る。現存盛土の高さ1m前後、窪地から盛土上部の比高差3m、盛土の外径160mである。検出された遺構は後期を主体とした住居跡8軒、土壇50基などである。

小林八束1遺跡は、元荒川・やどおり 星川・野通川等で開析された標高10m前後の埋没台地上に立地している。盛土は細長い調査区を横切る裾幅約30mで確認され、盛土北側に形成された谷を挟んだ微高地からは、土偶などを集積した祭祀遺構が検出された。谷底から盛土上面までの比高差約2mで遺構確認面は5面あり、住居跡及び多数の土壇が検出された。盛土は環状にならない可能性もある。現在盛土東側の谷部を調査中である。

氷川神社遺跡は、見沼低地から西へ約1km入った小支谷の台地上に立地している。氷川神社を取り囲むよ



空から見た雅楽谷遺跡



雅楽谷遺跡全体図



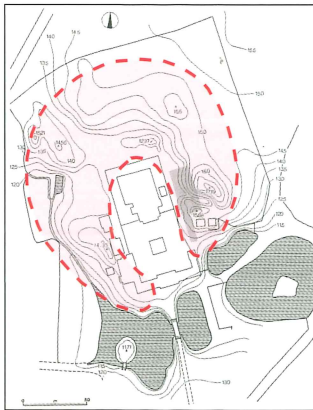
空から見た小林八束1遺跡



小林八束1遺跡祭祀遺物集中地点



氷川神社遺跡盛土土層断面



氷川神社遺跡全体図



馬場小室山遺跡全体図



馬場小室山遺跡調査風景

うに、南側を開口部とした盛土が途切れながら馬蹄形に廻る。湧水点とそれに続く池が盛土南側を囲んでいる。盛土は推定径約 170m、中央窪地との比高差約 4m である。盛土は後期中頃から晩期前半まで行われ、住居跡 16 軒、土壇 55 基が重層して検出された。特に中央窪地にかけての斜面に土壇が集中している。

馬場小室山遺跡は、見沼低地から 500m ほど入った台地縁部に立地している。中央部の径約 50m の袋状窪地を囲み、周囲約 100m の範囲に遺構が集中して

いる。盛土の中に住居跡などの多数の遺構が重複しており、特に完形土器が多数出土する祭祀的な巨大土壇 3 基を検出した。

2. 長竹遺跡の概要

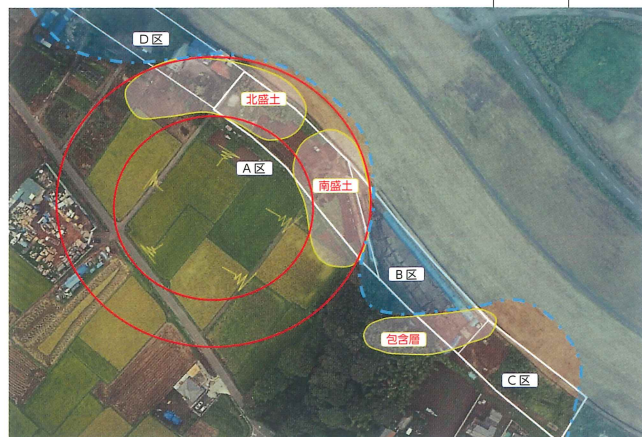
<位置>

長竹遺跡は、東武伊勢崎線加須駅から北へ約 7km の加須市大越に所在する。遺跡の北側には利根川が東流し、周辺には田園地帯が広がっている。縄文時代後期から晩期頃の遺跡周辺は、埼玉県南部から続く大宮台地の一部となっていたが、関東造盆地運動による沈降と、その後の利根川氾濫により、厚い堆積土に覆われ、現在の台地は深いところでは地下 4m にまで埋没している。標高は 15m である。

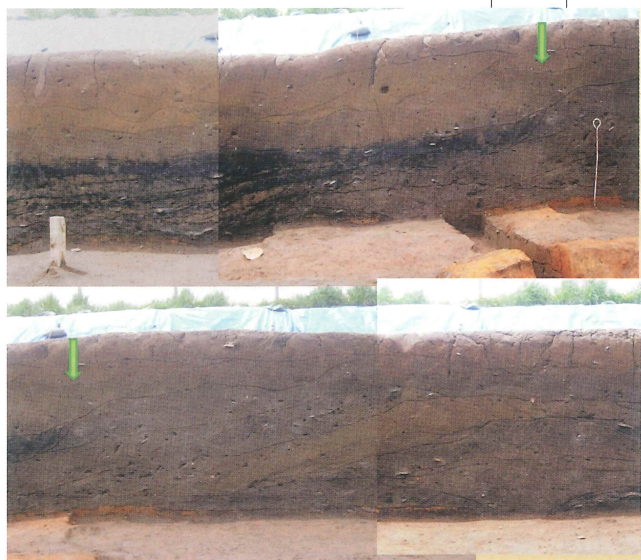
<環状盛土遺構の概要>

環状盛土遺構は、小さな窪地状の地形の一部を含み調査区を横断する形で検出された。調査区周辺部の地形及び遺物の分布から、推定外径約 150m、幅 20m 以上で、盛土の厚さは平均 1.5m、最大 1.8m で、周辺地を含めて環状に廻るものと想定される。環状盛土遺構は南盛土と小さな窪地を挟んで西側の北盛土に大きく分かれる。なお北盛土には一部浅い窪地が貫入しており、北盛土はさらに分割される可能性がある。

南盛土は、後期前葉から晩期中葉にかけての「大形建物址」、住居跡、掘立柱建物跡を主体とする居住域で、他に少数の土壇墓、貯蔵穴を含む土壇、多数の柱穴等の遺構が検出された。盛土の形成は最終的には晩期中葉安行 3d 式期に盛土の一部地区をローム質土で覆うように厚く盛り上げられていた。北側の小さな窪地では、盛土から続く縄文時代の厚い遺物包含層が途切れていた。また、窪地に向かう傾斜面は部分的にハードローム層が露出しており、後期の遺構は一部削平された状態で検出された。盛土の土層断面調査では、盛土造成は環の最も標高の高い場所から外側の谷地形の斜面に向かって徐々に埋め立てられている状況が観察できた。盛土の層位には後期前葉から晩期中葉までの各時期の遺物を含む土壌で形成された箇所がある。これ



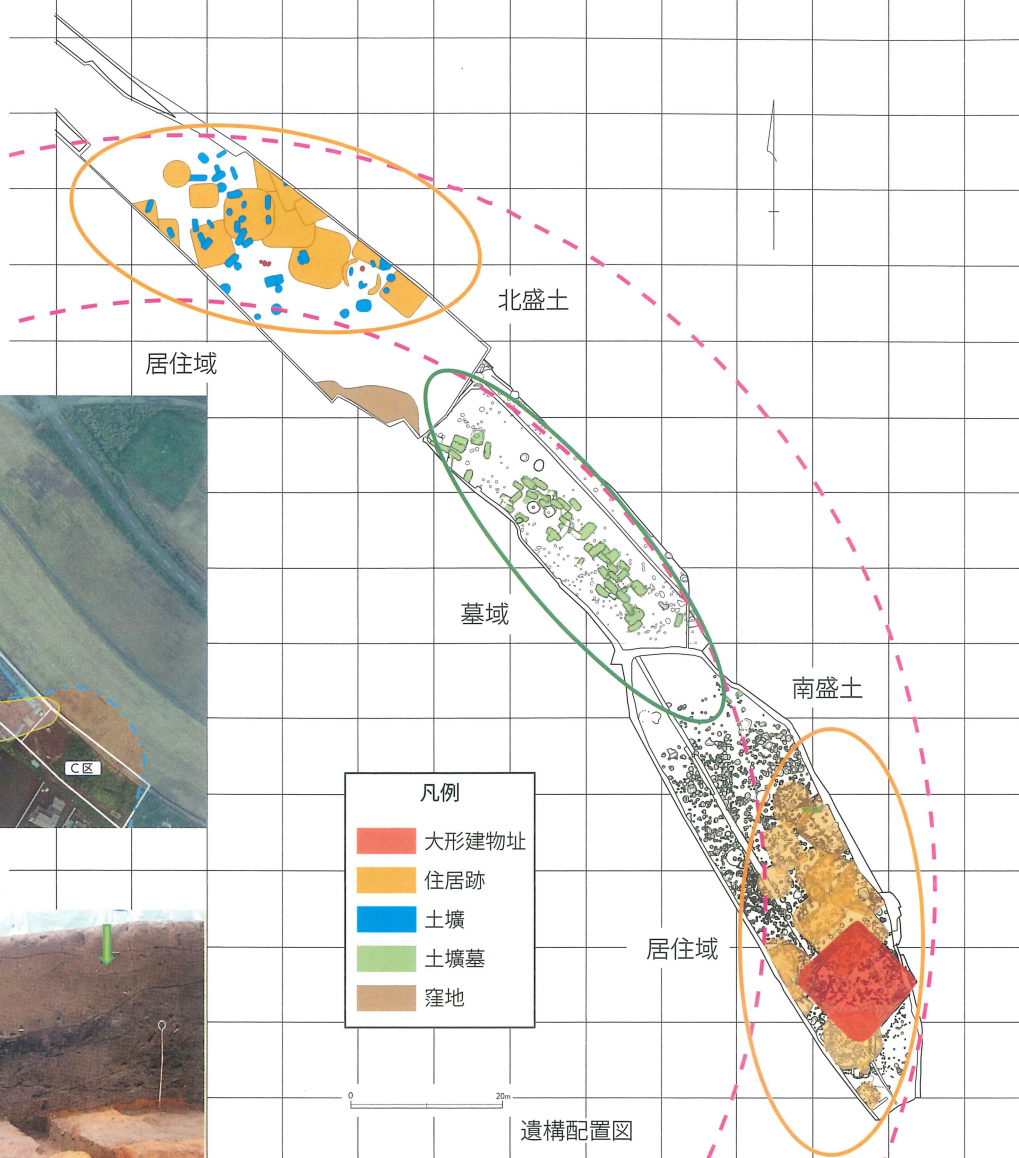
環状盛土の推定範囲



南盛土土層断面

らの層には土器の他にローム質土や焼土、炭化物が互層となって形成されており、一部では多量の骨片を含む層もあった。また、盛土中には住居跡や土塋などの遺構が重複して構築されたことや、硬化面の広がりや焼土面も確認できた。

特に一辺が12mある方形の「大形建物址」は合計3回の建て替えが行われ、炉跡が中央の炉跡を含めてその周囲に複数設けられている。また、床面は焼土がほぼ全面に敷かれている。出土遺物は、石棒・石剣・磨石・石皿などの石器・石製品や土偶、勾玉・耳栓（耳



飾り)などの土製品の他に骨角製の刺突具、異形台付土器などが出土したが、他の住居跡に比べ、祭祀用具などの非日常的な用具の出土が際立って多かった。

この「大形建物址」付近の盛土は、小丘状になるなど、不連続に堆積しているが、それ以外の場所では概ね均一な堆積状況であった。南盛土で検出された遺構は、縄文時代後期から晩期の「大形建物址」2棟、住居跡28軒、掘立柱建物跡3棟、土塋墓6基・土塋63基・ピット列1箇所・焼土跡21基・遺物集中10箇所、埋甕4基である。

北盛土で検出された遺構は、土塋墓60基・土塋8基・ピット列3箇所・焼土跡6基・遺物集中8箇所であった。土塋墓は縄文時代晩期前半が主体である。土塋墓は長方形で、両短辺側には小穴が設けられている。多くは、副葬品と思われる土器（注口土器等）が伴う。

土塋墓の平均的な大きさは、長軸が約2m、短軸が約1mである。長軸の向きが盛土の斜面に平行（北西



大形建物址



大形建物址出土遺物



北盛土土壙墓群

一南東)するものと直交(北東一南西)するものとに分けられる。軸が異なる理由は今後の検討に委ねるが、土壙墓の一辺を重ねるような位置関係で重複する例もあった点は注目される。小穴は、その直上の土層断面からは杭等が立っていた明確な痕跡は認められなかった。また、土壙墓から出土した注口土器や小壺を主体とする小形土器は副葬品として供えられていたと考えられる。

<まとめ>

これまでの環状盛土遺構に対する解釈は、中央の小さな窪地を囲むように土が盛られ続けた一大土木作業であるとともに、祭祀空間を合わせ持つ巨大な構造物とする考え方と、長期間にわたり居住域として占地されたため、生活遺物の廃棄や居住環境の整備が累積した結果形成されたとの考え方が並び立っている。

環状盛土遺構は、寺野東遺跡や埼玉県さいたま市馬場小室山遺跡などのように、一般には直径150～180mに及ぶ環状の盛土が形造られることが多い。縄文時代後期後葉から晩期の大規模遺跡で、特に貝塚形成を

伴う集落形態と環状盛土遺構を伴う集落形態に盛土形成過程と貝塚形成過程の類似点が認められる。但し、大規模な発掘調査例自体が少なく、盛土の目的や手順、居住域との関連性など全容は解明されていないが、近年調査の事例が増えつつあり先述の解釈を含めて今後に期待されるところである。

長竹遺跡の環状盛土遺構の南側は居住域として、北盛土の一部は墓域としての性格が明らかとなった。これに加え、北盛土の現在調査中の範囲は、居住域を主体に一部墓域が重なることが明らかとなりつつある。これまでの調査で発見された住居跡は、「大形建物址」と共に盛土中に重層しており、各時期の住居跡等の占地に規制があったことも推察できる。盛土の構築は各時期の遺構の累積過程を示し、おおむね晩期中葉に終焉を迎えるが、その最終段階に一部の地区をローム質土で封土した痕跡も確認できた。

文献

吉田稔 2014「長竹遺跡の環状盛土遺構について」『日本考古学』38号 日本考古学協会